

『知恩院史料集』 日鑑・書翰篇一

今日、浄土宗総本山知恩院には多数の文書と記録が伝蔵されている。その整理と目録の作製がここ数年来、知恩院史料編纂所によって着手され、その成果は昭和四十六年と四十七年に「知恩院文書目録」三篇となって同所から発行された。この基礎作業をもとに、主要な文書と記録の編纂刊行となったのが『知恩院史料集』であって、このたび公刊された本書はその第一冊目であり、「日鑑・書翰篇」の一である。

浄土宗鎮西派の総本山知恩院が東山山麓のさびさびとした一寺院から大きく雄飛したのは、周知のように中世後期からのことであり、また近世初頭には徳川家の香華寺院として大拡張工事が行なわれ、今日みるようなあの壮大な山容が完成し、全国的末寺組織や寺内の役者制度も安定した。本書に収められている知恩院の日鑑とはこの近

世知恩院の役者が毎日々々の出来事を記した日録であり、また書翰とは同じく役者が日々々の発翰と来翰を克明に冊子に控えたものである。

知恩院にかぎらず、京都の各宗本山の多くでは、このような日録の作製が寛文・元禄のころからはじめられている例が多い。だが、近世の京都の町、とくに洛中やこれら大寺院はたびたび大火に見舞われた。また明治五・六年をピークとする廃仏毀釈の嵐はとくに京都では激しかった。この故か、これらの日録が完全な形で今日まで保存されている例は極めて稀である。驚くべきことに、知恩院では今日、尨大な量にのぼる明治初年までの江戸時代毎年の日録と発翰・来翰の控が「華頂古記録」という名称のもとで一括保存されて来たのである。

知恩院山内の近世の動向はもとよりのこと、末寺統制の実態、多くの地方寺院の歴史、京都の町の出来事、知恩院と町人との交流、また朝廷や文化人との交渉、徳川家香華寺院という近世知恩院の性格に由来する幕府との密接な関係等々の注目すべき記

事が、この日鑑と書翰控につぎつぎと登場する。本書に収められた日鑑と書翰は国史学・国文学・仏教学・美術史などの研究の上で実に貴重な史料である。この意味でとくに日鑑は早くから学界で注目され、一部の記事が先学の研究に利用されたこともあったが、その全体が公開されず今日に至っていた。学界に対する本書公刊の意義はここにある。

さて本書に収録されているものは、日鑑・書翰控のうちの最古のもの、すなわち、元禄二年・同三年・同四年・同五年・同七年の日鑑と、延宝五年江戸年頭御書留帳、天和三年御案詞留帳、元禄二年役者中書翰控、元禄二年来翰、元禄四年来翰、元禄五年役者中書翰控、元禄六年役者書翰、元禄七年役者書翰、元禄八年書翰である。

読者の便宜をはかりながら、古文書学上の種々の検討と配慮を加えて本書の編纂に当られたのは、水野恭一郎氏の監修のもと、伊藤唯真氏が主任となり、平祐史氏をはじめ野田秀雄・中井真孝・木村靖・江島孝導・吉野修子・平祐輝・西脇達弥氏など、

仏教大学史学科の教官と知恩院史料編纂所
々員の人びとである。

近世の日鑑、あるいは日々の来翰・発翰
控のもつ学問的な重要性は、なんといつて
もそれが多年にわたってとぎれることなく
続いているという持続性にある。この種の
史料の公刊は編纂に直接従事される研究者
の努力もさることながら、数年ときには十
年以上にわたってこの編纂公刊事業を背後
で支える発行者の努力も大変なものであ
る。本書は「開宗八百年記念出版」と銘う
たれるごとく、知恩院の理解のもとに十年
計画で行なわれはじめた事業であるが、一
日も早い次巻の公刊と、さらにこの事業の
ねばり強い完成が期待されるところである。
(A5版 五四〇頁 昭和四九年三月十五日
京都市東山区林下町知恩院内総本山知恩院史料
編纂所刊 定価四、〇〇〇円、送料二〇〇円)
(藤井学・京都府立大学教授)

茨城県史編さん中世史部会編

『茨城県史料』中世編Ⅱ

茨城県は、中世文書に恵れた地域だとい
われている。日本史研究者がこの地域に興

味をそそられるのも、『常陸風土記』や『将
門記』の舞台であることもあろうが、良質
で豊富な中世文書の魅力に拠る所が大きい
のではなからうか。

今度、『中世編Ⅰ』をうけて、『茨城県
史編さん中世史部会(代表宝月圭吾氏)編
『茨城県史料中世編Ⅱ』が発刊され、茨城
県所在の中世文書が、より多くまとまった
形で見られるようになったことをまず喜び
たい。

先編が県東南部所在の文書——鹿島神宮
関係の文書や「税所文書」など——を対象
としているのに対して、今編では、東茨
城・那珂・久慈・多賀の北部四郡所在の中
世文書千二十数点が収録されている。先編
と同じく巻頭に六十数頁に及ぶ、郡史・寺
社史・文書解題からなる行きとどいた解説
が付されている。この紹介もこれに拠る所
が多いが、学問的検討に耐えると共に、啓
蒙性も持たねばならない県史の性格を踏え
て史料集が編まれている点に敬意を表した
い。

さて、収録文書の紹介に移るが、まず国

衙関係の良質の文書が多いことが本編の特
色である。「税所文書」は、先編所収文書
の後半部分に相当し、室町・戦国時代の文
書が収められている。弘安二年「作田惣勘
文」の添状である「大豫詮国書状」、伊勢
大神宮役夫工米関係文書などは一国平均役
徴収機構に関する史料となる。常陸一宮鹿
島神宮の七月祭大使役勤仕の文書は「鹿島
神宮文書」と関連させれば、一宮祭礼と在
地領主とのかわりも明らかとなるであろ
う。常陸三宮である「吉田神社」やその別
当寺「吉田薬王院」の文書は、原本焼失の
ため、水戸彰考館所蔵の写本を底本にして
収録されている。前者は鎌倉時代の文書が
多く、社領支配や社殿造営・修理をめぐっ
て、鎌倉将軍家・国衙・領家小槻氏から発
給された文書が中心を占め、領主制や東国
政権論など中世史の主要問題に直接かわ
る著名な文書がかなりある。また、官務小
槻氏研究にも不可欠の史料といえる。後者
には、天文から天正にかけて、絹衣の着用
をめぐる、常陸のみならず京までも舞台
にして、天台宗と真言宗の間で争われた